

大学体育による非スポーツ学生の社会人基礎力の変容

—本学での教養体育の授業期間前・後での調査結果—

古田 康生 (岐阜協立大学経営学部)

日比千穂 (大垣女子短期大学・大垣市レクリエーション協会)

キーワード：大学体育、社会人基礎力業、非スポーツ学生

1. はじめに (研究課題の背景と問題の所在)

1.1 大学教育における大学体育 (体育実技) の意義 (研究課題の背景)

1991 年に大学設置基準の大綱化により、「大学体育を必修科目とする法的根拠」がなくなった¹⁷⁾。それ以来今日まで大学で体育及びスポーツ実技の授業をする意義について長らく議論が繰り返されている。岐阜協立大学 (以下、本学とする) でもこの議論が継続的に在り、教養科目としての体育実技の在り方に関する議論が繰り返されている。特に、本学の経済学部や経営学部経営情報学科、看護学科に在籍し、スポーツを専攻しない学生や特定の強化・準強化指定クラブに所属して日常的にスポーツをしていない非スポーツ学生の体育実技の必要の是非については学生不在の下で客観的根拠も示されないままに科目の必要性・不要が議論されている。これまで教養としての体育実技 (以下、大学体育とも記載して同じ意味で用いる) の必要性や存在意義を示すために数多くの調査及び研究が報告されている。例えば、近年では大学での「学位授与の判断のための基本的な方針」すなわち、ディプロマ・ポリシー (Diproma policy : 大学がその教育理念を踏まえてどのような力 (能力) を身に付ければ学位を授与するのかを定めた基本的方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの) に則った大学体育の教育内容とその教育的効果¹⁵⁾、アクティブラーニングの一つとしての大学体育の教育的効果¹⁴⁾、経済産業省が提唱した「社会人基礎力」¹²⁾ に対する効果^{5) 7) 9) 11)} などとがあり、大学体育の存在意義が客観的なエビデンス (数的根拠) を用いて示されている。

例えば、能動的学修である「アクティブ・ラーニング」については、「大学体育は、学生がチームを編成して、相互にコミュニケーションを図り、スポーツ活動に取り組み、提示された課題を解決するため道筋を立てて能動的に取り組む」ため、大学体育は代表的なアクティブ・ラーニングの一つと考えられている。そしてその客観的根拠を示し、その有益性を検討する尺度として社会人基礎力¹²⁾ が用いられて効果が複数報告されている。すなわち、大学体育の履修学生の社会人基礎力が改善するといった報告^{2) 5) 7) 9) 16)} が示されている。石道ら^{8) 9)} は大学体育授業を履修した学生と非履修学生の社会人基礎力を比較した結果、履修学生ではアクションが非履修学生よりも有意に高値を示したと報告している。また、引原ら⁷⁾ はトレーニング型の授業を受講した学生と比較してネット型の授業の学生では主体性、働きかける力、課題発見力、傾聴力、状況把握力の 5 つの能力要素の得点が向上したと報告している。金田と引原¹¹⁾ はゴルフを履修した学生を対象にその授業前後で社会人基礎力を調査した結果、12 の能力要素の内、主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、発信力の得点が向上したと報告している。本学では大学体育による社会人基礎力の改善^{2) 4)} に加えて非スポーツ学生の健康体力面での危機的状況を全身持久力¹⁾ と体脂肪や除脂肪体重といった身体組成³⁾ の客観的指標を用いて報告し、必修体育の意義を訴えてきた。

1.2 大学体育連合の提言（大学体育の必要性）

公益社団法人大学体育連合は、大学設置基準の太網化に備えて、平成2年（1990年）「大学体育の必要性についての提言」を発表している¹³⁾。その中で、大学体育の必要性を4つの側面、つまり、「正課の授業」、「課外のスポーツ」、「健康管理」、そして「生涯学習」の視点を示して主張している。その内、「正課の授業」では以下の視点が必要とし、その有益性を示している。

『大学体育の必要性についての提言』¹³⁾（平成2年（1990年）公益社団法人大学体育連合からの引用）
大学体育における「正課の授業」は、次のような視点が必要である。

（1）21世紀社会のもたらす身体や身体感覚の変容は、大学等の授業で補償的な身体経験が必要とする。この視点はすべての教育段階で必要なものである。学生時代のこの期に、身体運動に関わる学習の経験が欠くことは日本国家の重大な損失になりかねない。

（2）基本的な身体能力（身体のリテラシー）の育成は、高等学校卒業後の発育発達の完成期にある学生にとって必要不可欠である。

（3）大学体育の「正課の授業」は、その知的水準に応じた、そして学究的な精神に基づいた内容が要求される。つまり、実技と理論の統合が必要であり、このことが真の教養教育である「arts and sciences」統合ということに通ずることになる。身体や身体運動に関する教育が「わかって、できる」という姿勢を保持することによって「身体教養」を学生に身につけさせることができる。

（4）身体運動の果たす役割には、人間の機能的側面と歴史的・社会的・文化的側面の調和が必要とされる。このことは体育の理論面の教育において、これら2つの側面を統合して学生に学習させる必要性を意味する。

（5）学生の価値観の多様化とさまざまな身体運動の志向を可能にするためには、責任ある教育主体によって豊富なプログラムが用意されなければならない。またそのためには、教育の場としての適正な施設が用意されなければならない。

このように「正課の授業」は、身体運動の実践を通して規範と役割に基づく、学生間の相互関係を中心として展開されるものである。その意味で、社会的な能力や態度の育成、道徳的な側面の教育の可能性も大きい。学時代に養われた体験的な蓄積は、将来にわたって健康・体力の保持増進などに資することはいままでのない。心身ともに健康な学生を育成することは、社会の指導者を育成するという大学の責務から必要な視点であると言える。

このように、①身体感覚の変容は大学等の授業での補償的な身体経験を必要とする、②基本的な身体能力の育成、③わかって、できるという「身体教養」の修得、④人間の機能的側面と歴史的・社会的・文化的側面の調和を実技と理論の両側面から学習させる、といった視点が示され、大学教育での大学体育の必要性を訴えている。

1.3 本学「体育実技A・B」の教育内容と種目間の共通教育目標

（1）本学「体育実技A・B」の教育内容

本学での「大学体育」にあたる「体育実技A（前期開講）及びB（後期開講）（以下、体育実技とする）」は、カリキュラム区分では基礎教養科目に位置づけられ、経済学部及び経営学部では必修科目、看護学部では選択科目となっている。経済学部（経済学科と公共政策学科）と経営学部経営情報学科、看護学部は、前期後期ともに木曜1限に開講、経営学部スポーツ経営学科は、金曜1限に開講され、それぞれ同一時間帯にて授業が実施されている。ただし、安全面の配慮や施設の制約もあり、全ての学生が同一施設（場所：体育館やグラウンド）にて、同一授業担当者（教員）の授業を受講する訳ではない。つまり、使用する体育施設とスポーツ種目に適した受講学生数に分かれて複数のスポーツ種目の授業が複数の教員によって運営

されている。例えば、2024年度の体育実技A（前期開講）の木曜1限では、バレーボール、卓球、レクスポーツ、トレーニング、バドミントン、ソフトボール、サッカー、保健クラス（何らかの事情により通常の種目が履修できない学生に配慮されたクラス）の8種目が開講されている。金曜1限では、バレーボール、レクスポーツ、バドミントン（体育実技B（後期開講）は、ジョギング&ランニング）、トレーニング、サッカーの5種目が開講されている。

（2）体育実技A・Bの全種目に共通する教育目標

本学の体育実技は、同一科目名ではあるが実施するスポーツ種目が異なるため、シラバスに記載される教育目的や到達目標、評価方法は異なる。しかし、科目の共通性を確保するため、体育実技には「共通の教育目標」がある。

『2024年度 体育実技・スポーツ実習実施要項』⁶⁾ から引用

教育目標

体育実技は、全人的教育の一環として、健康とスポーツに関する科学的な知識を学習し、心身の健康の保持・増進とスポーツの正しい実践能力を育成することを目的とする。ここでは、スポーツの技術と特性に関する知識と実践能力の習得のみならず、健康の保持・増進と体力向上のために必要なトレーニング方法と運動処方の理論と実際について学ぶ。具体的には、次の5つの教育目標を掲げている。

- 1) スポーツ文化を正しく理解するだけでなく、身体の諸現象およびスポーツ事象などに対し問題意識を持ち、進んでその問題を解決できる科学的・論理的思考能力を育成する。
- 2) からだとスポーツの関わり、健康と体力、保健衛生などについての科学的な基礎知識を理解し、スポーツの実践を通して、非健康的な要因をなくし、心身の健康の保持・増進をはかる方法と態度を育成する。
- 3) 大学生活だけでなく、将来の社会生活においても、それぞれの年齢・年代に相応しい運動処方やスポーツプログラムを自ら作成できる能力を育成する。
- 4) 自由裁量時間（余暇）は労働時間の短縮と平均寿命の伸びとも絡み合っており、ますます増大しつつある。それゆえに、スポーツやレクリエーションが日常生活において占める重要性はさらに高まっており、この学習で生涯スポーツに連動する知識と実践能力を育成する。
- 5) 体育は、能動的な社会性の育成や人間性の理解に役立つ一つの領域である。この学習に自主的、主体的に参加することによって、自己を開発する能力と健全な人間関係を形成する能力を育成する。

この「教育目標」からは、本学の体育実技が、単にスポーツをする機会の提供やスポーツ技能の習得だけを目標としていないことは誰が読んでも理解できる事実である。

1.4 体育実技A・Bのルーブリックとその観点

本学の体育実技では2022年度以降、「ルーブリック」を用いている⁶⁾。本学の体育実技では、ルーブリックを学習目標の達成度合いを担当教員と受講学生の双方が「判断する」助けにするため、評価の観点と評価の尺度を一覧表にして可視化して示した評価方法の一つと考えている。本学では、前期と後期ともに実際に実技活動を開始する前のガイダンスにて口頭にて説明している。具体的には、まず、目標の達成度をどのような観点で評価するのか、次いで、目標達成に向けてどのレベルにまで達することを求めているのか、その評価の「観点」と「尺度」をマトリクス表で示して絶対評価の判断基準を示している。本学の体育実技では、生涯スポーツの礎となるスポーツと親しむ態度を修得するため、『スポーツ好きになるための観点である「楽しむ」ために必要な要素を中心とした評価』を主観点としている。そして具体的な観点として、①真剣・本気・全力で取り組めたか、②ルール（規律と同意）を守って取り組めたか、③仲間や相手とのよい関わりを持てたか、④授業の運営への参加ができていたか、⑤授業を通じて新たなスキルの獲得が

あったか、⑥獲得したスキルを発揮できたか?の6つの観点ごとに評価尺度(到達段階)を示している。

1.5 研究目的(問題の所在)

本学の体育実技では、その必要性を全身持久力や身体組成といった生理学的視点から科学的根拠を示してその有益性を主張した¹⁾³⁾。また、履修学生の社会人基礎力に統計的な有意な向上が認められることも報告²⁾⁴⁾した。しかし、これらの報告は、調査対象学生がスポーツを専攻する学生やスポーツ系の部活動に所属する学生であり、その他のスポーツを専攻しない一般学生では確認できていない、という指摘がある。そこで、本調査ではスポーツを専攻せず、またスポーツ系の強化指定・準強化指定の部活動に所属していない非スポーツ学生を調査対象として大学体育の履修による社会人基礎力の変容を調査し、その教育的効果を確認することを目的とした。

2. 研究(調査)の方法

2.1. 調査対象学生

表1は本研究での調査対象学生数である。本研究で調査対象となったのは本学にて経済学部及び経営学部経営情報学科、看護学部の1年次に在籍し、強化指定クラブにて特定のスポーツ活動をしていない非スポーツ学生で、大学体育に位置づけられる初年次開講科目の体育実技A(前期開講科目)を履修する学生168名の内、バドミントンとレクスポーツを履修した40名である。本調査は体育実技Aにて実施するバドミントンとレクスポーツの2種目にて担当教員から調査実施の了解を得た後に調査対象となる学生から承諾が得た。なお、調査対象となった2種目とも履修学生の専攻には偏りがなく、非スポーツ学生が在籍する学部学科の全てが含まれていた。

表1 専攻別の調査対象学生数

| 性別 | 経済学部 | 経営学部経営情報学科 | 看護学部 | 小計 |
|------|------|------------|------|----|
| 男子学生 | 12 | 11 | 0 | 23 |
| 女子学生 | 1 | 6 | 10 | 17 |
| 小計 | 13 | 17 | 10 | 40 |

単位:人数

2.2. 調査期間

調査期間は2023年前期(4月～7月)であり、この期間内に全ての調査を実施した。4月上旬に調査した社会人基礎力の調査結果を事前値、7月下旬に調査した結果を事後値とした。

2.3. 質問紙調査の手順と方法

調査は記名自記式質問紙法を用いた。質問紙は集合配布とし、本学講義室及び体育館(アリーナ)にて依頼文書および質問紙を配布して文書と口頭により研究主旨を説明し、研究協力を依頼した。研究に関する主旨や回答方法、質問紙の回収法、倫理的配慮などを説明し、同意した学生のみ回答し、質問紙を回収ボックスに提出する留め置き法にて回収した。回収後の質問紙は直ちに個別に管理番号を付けて調査値をパソコンに入力した後、鍵付きロッカーにて適正に保管した。

2.4. 調査対象学生が履修した種目:レクスポーツとバドミントンの概要

本研究で調査対象とした体育実技のレクスポーツとバドミントンは、本学の基礎教養科目で1年次に開講され、1単位卒業必修(看護学部のみ選択科目)である。体育実技Aは前期に開講し、前期と後期で異なる種目を選択させている。レクスポーツでは、タスポニーやボッチャ、ふらばー、インディアカといっ

た高等学校までの保健体育科授業では経験していないニュースポーツと呼ばれるレクスポーツ種目を複数活動することで生涯にわたってスポーツに親しむ態度を修得させている。一方、バドミントンでは、その基礎技能やルールを理解だけでなく、シングルスやダブルスのゲームをコートごとで運営するマネジメント能力や一緒に活動するコートの仲間とコミュニケーションを図り、人間関係づくりにも注力している。

2.5. 調査内容(項目)

まず、基本属性として学年、年齢、性別、体育実技 A での選択した種目名を回答させた。次に、社会人基礎力（経済産業省）¹²⁾ を NPO 法人日本インターンシップ推進協会が Web 上にて提供している「社会人基礎力自己評価シート」を使用して質問紙を作成し、現時点で自覚する社会人基礎力を自己評価により回答させた。本研究で用いた社会人基礎力自己評価質問紙は、それを構成する 3 つの能力のシンキング、アクション、チームワークの下位項目の 12 能力要素から質問項目が構成され、各 3 つの質問からなり、合計 36 項目の質問で構成されている。回答は 5 段階で自己評価させ、各得点の評価基準は、得点 5 が「とても良くあてはまる」、得点 4 が「良くあてはまる」、得点 3 が「どちらともいえない」、得点 2 が「あまりあてはまらない」、得点 1 が「あてはまらない」と設定した。そして、各能力要素の質問項目合計得点を社会人基礎力自己評価総得点として個別の代表値とした。3 つの能力ごとの平均得点を能力得点平均値とし、12 つの能力要素ごとの平均得点を能力要素得点平均値とした。

2.6. 用語の定義

2.6.1. 社会人基礎力（経済産業省）

社会人基礎力¹²⁾とは、2006年に経済産業省が提唱した定義である。すなわち、「職場や社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な能力」とした。この 3 つの能力、すなわち(1)前に踏み出す力(アクション):一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力、(2)考え抜く力(シンキング):疑問を持ち、考え抜く力、(3)チームで働く力(チームワーク):多様な人々とともに、目標に向けて協力する力の能力で構成され、さらにそれぞれの下位項目としてアクションは主体性、働きかけ力、実行力。シンキングは、課題発見力、計画力、創造力。チームワークは発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の 12 能力要素で構成されている。

2.6.2. レクスポーツ

体育実技 A でのレクスポーツは、レクリエーション・スポーツやニュースポーツと同意である。本学で実施する具体的な種目の例としては、インディアカやタスポニー、ターゲットバードゴルフ、ボッチャ、ソフトバレーボール、ふらばー、といった種目がある。

2.7. 統計処理

本研究では、体育実技 A（レクスポーツとバドミントン）の履修による社会人基礎力の変容を調査した。事前値(4月)と事後値(7月)の社会人基礎力自己評価総得点の差異を検討するためノンパラメトリック検定のウィルコクソン(Willcoxon)の T テストを実施した。また、調査対象学生が授業期間で成長したと自覚した能力をアクション、シンキング、チームワークから選択して回答させた。その回答数は、 χ^2 検定により比較検討した。統計処理は Microsoft Excel にて実施した。なお、3 つの能力得点平均値と 12 つの能力要素得点平均値の変容は傾向を確認するにとどめた。

2.8. 倫理的配慮

調査対象となった学生に研究主旨と実施の意義、調査方法、研究結果の公表においては、個人情報保護を遵守し、得られたデータは統計的に処理され集団の結果とするため個人が特定されない、データは本研究の目的以外では使用しない、調査協力は自由であり、不参加や途中で中止であっても、不利益は生じないと説明し、同意を得た後に回答させ、回答の提出をもって同意が得られたものとした。なお、本研究

は岐阜協立大学研究推進委員会規則『岐阜協立大学における研究者の行動規範』を遵守して実施した。

3.調査結果(得られた結果)

3.1. 質問紙の配布と回収率

質問紙調査は、前期授業が開始された直後の 2023 年 4 月と前期授業期間が終了する授業最終日（15 回目授業）の 7 月に体育実技 A を履修する調査対象学生に配布し、その場で回収され、欠損値のない質問紙の 40 名分をサンプルとして分析対象とした。調査対象の 42 名の内、40 名から回答が得られ回収率は 95.24%であった。

3.2. 調査対象学生の社会人基礎力の自己評価総得点（3つの能力自己評価総得点の合計値）

表 2 に調査対象学生の社会人基礎力自己評価総得点の平均値および標準偏差を示した。3 つの能力は 12 の能力要素で構成され、各 3 つの質問項目が 5 段階のリッカート尺度により設定されているため、最小値が 36 点、最大値が 180 点となる。質問項目ごとに得点化し、その値を個別の社会人基礎力自己評価総得点とした。自己評価総得点の合計値の事前値と事後値の差の検討では、対応のある 2 つの代表値の差の検定のため、ノンパラメトリック検定のウィルコクソン (Wilcoxon) の T テストを用いた。その結果、事前値 (78.51 ± 27.47) と事後値 (83.00 ± 25.38) に統計的有意差が認められ、体育実技にて社会人基礎力が向上する結果を得た。この期間で 5 ポイント程度の向上が認められた。

表2 社会人基礎力自己評価総得点の事前値と事後値

| | 社会人基礎力自己評価総得点 | |
|------|---------------|---------|
| | 事前値(4月) | 事後値(7月) |
| 平均値 | 78.51 | 83.00 |
| 標準偏差 | 27.47 | 25.38 |
| 中央値 | 75 | 84 |
| 25%値 | 59 | 68 |
| 75%値 | 96 | 101 |
| Z値 | | 3.68 |
| P値 | | 1.95 |

n=40

3.3. 3つの能力別自己評価得点平均値の変容

社会人基礎力を構成する 3 つの能力、すなわち【アクション】、【シンキング】、【チームワーク】の自己評価得点平均値と標準偏差の事前値と事後値を表 3 に示した。なお以下、3 つの能力は【 】で示す。

【アクション】では、自己評価得点の事前値と比較して事後値では 0.13 ポイント (ポイント増加率 6.10%) の増加があった。【シンキング】では、同じく事前値と事後値を比較した結果、0.07 ポイント (増加率は 3.045%) の増加であった。そして、【チームワーク】では、0.13 ポイント (増加率は 6.07%) の増加が認められた。いずれの能力も期間を通して得点平均値が増加する傾向があった。

3.4 3つの能力の 12 能力要素の自己評価得点平均値の変容

表 4、表 5、表 6 は、3 つの能力の下位項目にあたる 12 の能力要素の自己評価得点平均値及び標準偏差である。以下、12 の能力要素は、「 」で示す。なお、ここでは、サンプル数が少ないことから事前値と事後値の変容の傾向を確認するに留め、統計処理はしていない。

表3 非スポーツ学生の社会人基礎力の3つの能力自己評価得点の変容

| 能力 | | 事前値(4月) | 事後値(7月) | 差 | 増加率(%) |
|--------|------|---------|---------|------|--------|
| アクション | 平均点 | 2.13 | 2.26 | 0.13 | 106.10 |
| | 標準偏差 | 0.95 | 0.92 | | |
| | n | 40 | 40 | | |
| シンキング | 平均点 | 2.3 | 2.37 | 0.07 | 103.04 |
| | 標準偏差 | 0.98 | 0.87 | | |
| | n | 40 | 40 | | |
| チームワーク | 平均点 | 2.14 | 2.27 | 0.13 | 106.07 |
| | 標準偏差 | 1.01 | 0.98 | | |
| | n | 40 | 40 | | |

n=調査対象学生数

3.4.1. 【アクション】の3つの能力要素の自己評価得点平均値の変容

表4は、【アクション】を構成する3つの能力要素の「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」の自己評価得点の変容を示した。その結果、3つの全てでポイントの増加が認められた。「働きかけ力」と「実行力」では、事前値と事後値を比較すると約0.15ポイント（約7.00%程度）の増加であったが、「主体性」では、他の2つの能力要素に比べて0.07ポイント（3.35%）の変容と増加幅が小さい傾向を示した（表4）。

表4 非スポーツ学生の社会人基礎力の12つの能力要素自己評価得点の変容(シンキング)

| 能力 | | | 事前値(4月) | 事後値(7月) | 差 | 増加率(%) |
|-------|-------|------|---------|---------|------|--------|
| アクション | 主体性 | 平均点 | 2.09 | 2.16 | 0.07 | 103.35 |
| | | 標準偏差 | 0.91 | 0.91 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 働きかけ力 | 平均点 | 2.13 | 2.28 | 0.15 | 107.04 |
| | | 標準偏差 | 1.02 | 0.95 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 実行力 | 平均点 | 2.17 | 2.33 | 0.16 | 107.37 |
| | | 標準偏差 | 0.94 | 0.89 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |

3.4.2. 【シンキング】の3つの能力要素の自己評価得点平均値の変容

表5は、【シンキング】を構成する3つの能力要素である「課題発見力」、「計画力」、「創造力」の自己評価得点の変容を示した。その結果、3つの能力要素のうち、2つの項目において自己評価得点が事前値と比較して事後値が増加する結果を得た。増加幅では、「課題発見力」が0.07ポイント（3.07%の増加）、「創造性」が0.14ポイント（6.42%の増加）であった。しかし、「計画力」は0.02ポイント（0.82%）減少する結果となった（表5）。

3.4.3. 【チームワーク】の6つの能力要素の自己評価得点平均値の変容

表6は、【チームワーク】を構成する6つの能力要素の「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール」の自己評価得点平均値の変容を示した。その結果、6つの能力要素の全ての項目において自己評価得点が事前値と比較して事後値が増加していた。「状況把握力」と「規律性」では10%近い得点の増加が認められた。この増加幅は12の能力要素の内、最も大きい結果となった。また、「発信力」と「柔軟性」についても5%程度の得点平均値の増加が認められた。一方、「傾聴力」と「ストレスコントロール」では他の4つの能力要素と比較して大きな増加は認められなかった（表6）。

表5 非スポーツ学生の社会人基礎力の12つの能力要素自己評価得点の変容(シンキング)

| 能力 | | 事前値(4月) | 事後値(7月) | 差 | 増加率(%) | |
|-------|-------|---------|---------|------|--------|--------|
| シンキング | 課題発見力 | 平均点 | 2.28 | 2.35 | 0.07 | 103.07 |
| | | 標準偏差 | 1.00 | 0.89 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 計画力 | 平均点 | 2.45 | 2.43 | -0.02 | 99.18 |
| | | 標準偏差 | 1.02 | 0.87 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 創造力 | 平均点 | 2.18 | 2.32 | 0.14 | 106.42 |
| | | 標準偏差 | 0.89 | 0.83 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |

表6 非スポーツ学生の社会人基礎力の12つの能力要素自己評価得点の変容(チームワーク)

| 能力 | | 事前値(4月) | 事後値(7月) | 差 | 増加率(%) | |
|--------|------------|---------|---------|------|--------|--------|
| チームワーク | 発信力 | 平均点 | 2.31 | 2.41 | 0.10 | 104.33 |
| | | 標準偏差 | 0.96 | 0.89 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 傾聴力 | 平均点 | 2.05 | 2.11 | 0.06 | 102.93 |
| | | 標準偏差 | 0.98 | 0.91 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 柔軟性 | 平均点 | 2.08 | 2.19 | 0.11 | 105.29 |
| | | 標準偏差 | 1.01 | 0.98 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 情況把握力 | 平均点 | 2.07 | 2.26 | 0.19 | 109.18 |
| | | 標準偏差 | 0.94 | 0.95 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | 規律性 | 平均点 | 1.93 | 2.12 | 0.19 | 109.84 |
| | | 標準偏差 | 1.06 | 0.96 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |
| | ストレスコントロール | 平均点 | 2.40 | 2.42 | 0.02 | 100.83 |
| | | 標準偏差 | 1.05 | 1.04 | | |
| | | n | 40 | 40 | | |

今回の調査では、12 の能力要素の内、11 の能力要素にて自己評価得点平均値が増加する結果となった。ただし、事前値と比較して事後値の得点平均値の増加率には「大きい」あるいは「小さい」の差があり、個々の能力要素によって異なる傾向が認められた。すあんわち、12 の能力要素で一律の変容を示すことはなかった。

3.4.4. 調査対象学生が成長を自覚した3つの能力とその理由の記述

本研究では、調査対象学生に【アクション】、【シンキング】、【チームワーク】の3つの能力から体育実技にて成長を自覚できた能力を一つ選択させて回答を求めた。それぞれの能力ごとに回答した調査対象学生の割合は次の通りである。【アクション】と回答した学生は、25.00% (10名)であった。【シンキング】では、22.50% (9名)、【チームワーク】では52.50% (21名)となり、【チームワーク】との回答が最も多い結果となり、 χ^2 検定により統計的有意差が認められた。次に、調査対象学生が「成長を自覚できた能力の具体的事象」を自由記述で回答させた結果が表7である。最も記述数が多かったのは【チームワーク】であり、3つの能力の自己評価得点平均値の変容と一致した。具体的な理由として記述された回答内容は、

「ダブルスなどで励まし合いながらゲームができた」や「準備など皆と協力してできた。ダブルスでもお互いに協力することが多かった」といった授業での取り組み方にて見られる場面の記述が複数認められた。また、本学体育実技の特徴でもある複数学部・複数学科の学生が合同で受講するため、「学部が違う仲間が集まって必然的にコミュニケーションが図れた」や「皆で声を掛け合い励まし合いながら楽しむことができた」、「仲間に頼ったり、仲間に声をかけたりすることができた」、「他学部の人とも協力して取り組み、たくさんの人との関わりができるようになった」などといった回答も認められた。次に【アクション】では、「試合でペアを組んだ時に感情をうまくコントロールできるようになった」や「自分から積極的に練習したり、友達との関係を創ろうとした」、「苦手でも上手くできるように練習では努力し、挑戦した、ゲームではボールを返球できるように集中して取り組んだ」などといった回答が認められた。そして、【シンキング】では、「強い人にどのように勝つかウオーミングアップの時から作戦を考えていた」や「最初はラケットにあたらなかったが仲間に助言を求めたり、何回も挑戦し、考えながらプレイすることでできるようになった」、「自分の課題を見つけ出すことができた。ダブルスで自分の課題を修正できるよう工夫してプレイした」、「どうしたら上手くなるか考えて練習したり、ダブルスではペアの仲間の苦手をカバーできるよう頑張った」など履修するスポーツ種目に対して積極的に取り組み、技術的にできないことがあってもできるように前向きに取り組む姿勢が言語化されて回答していた。

表7 調査対象学生が成長を自覚した能力の理由として記述した内容

| 能力 | 調査対象学生が自覚した「能力」成長の理由 |
|--------|---|
| アクション | 試合でペアを組んだ時感情をうまくコントロールできるようになった 自分から積極的に練習したり、友達との関係を創ろうとした 苦手でも上手くできるように練習では努力し、挑戦した、ゲームではボールを返球できるように集中して取り組んだ ゲームをすることで判断力が成長した 一度失敗したことを見直し、次に失敗しないように工夫した ボールを落とさないために失敗しても良いのでたくさん動くことができた プレイに最適な動きを考えてそれが実行できた |
| シンキング | 強い人にどのように勝つかウオーミングアップの時から作戦を考えていた 最初はラケットにあたらなかったが仲間に助言を求めたり、何回も挑戦し、考えながらプレイすることでできるようになった 自分の課題を見つけ出すことができた。ダブルスで自分の課題を修正できるよう工夫してプレイした どうしたら上手くなるか考えて練習したり、ダブルスではペアの仲間の苦手をカバーできるよう頑張った 準備など周りを見て行動できた 自分が今どうするとチームが勝てるか考えながらプレイした。動いた方が良いか仲間に任せ方が良いか考えてプレイできた。課題発見力や計画力が身についた ふらばーやタスポに――など初めて実施するすばー一つではどうすれば上手くいくか考えそれをゲームで活かすことができた 運動が得意ではないのでどうやったら少しでもうまくできるか考えながら行った スポーツの技術や戦術などどこが課題なのか疑問を持って行動できた |
| チームワーク | ダブルスなどで励まし合いながらゲームができた 準備など皆と協力してできた。ダブルスでもお互いに協力することが多かった 学部が違う仲間が集まって必然的にコミュニケーションが図れた 皆で声を掛け合い励まし合いながら楽しむことができた 仲間に頼ったり、仲間に声をかけたりすることができた 他学部の人とも協力して取り組み、たくさんの人との関わりができるようになった 他の学部学科の学生とペアを組む機会が多くチームワークが成長した 初対面の人とのチーム編成やペアを組むことでゲーム進行などについて考え話し合うことができた 話したことがない人にも積極的に声をかけたり、チームメンバーの意見を詳しく聞いたりすることが自然にできるようになった 様々な学生とペア組ゲームができた ダブルスなどで声掛けを意識的にして勝つことができた ゲームをするとき名前を言い合ってコミュニケーションを図った ダブルスの時のペアのミスや上手い時に声掛けができた、自分のチームの試合の応援をして協力してプレイすることができた |

4.考察

本研究では、本学で大学体育にあたる教養科目「体育実技A」のバドミントンとレクスポーツを履修する非スポーツ専攻学生を対象に社会人基礎力を構成する3つの能力及び12の能力要素の自己評価得点が授業期間（半期）を通してどの様に変容を調査することを目的とした。これは、強化指定クラブでの部活動

に取り組む学生やスポーツを専攻する学生と同様に非スポーツ学生においても大学体育を履修ことで社会人基礎力が向上するか確認することで非スポーツ学生が大学体育を履修する価値を再確認する意味も含まれる。

4.1. 社会人基礎力自己評価総得点の変容

本研究で調査対象となった非スポーツ学生の社会人基礎力自己評価総得点は、入学直後の4月に調査した事前値平均値が 78.51 ± 27.47 であるのに対して、授業期間最終日（15回目授業）の事後値では 83.00 ± 25.38 となり、4.49ポイント（5.72%）の増加し、統計的有意差が認められた。これまで本学の体育実技による社会人基礎力の変容ではスポーツ学生にて年間を通して社会人基礎力自己評価総得点の向上が認められたことを報告⁴⁾したが、非スポーツ学生においても同様に「大学体育（本学での体育実技）を履修することで社会人基礎力が向上する」ことが認められる結果を得た。この結果は、これまでに報告されてきた“大学体育は社会人基礎力を向上させることが期待できる”という先行研究を支持するものである。

4.2. 社会人基礎力3つの能力と12の能力要素の変容

4.2.1. 【アクション】の変容

【アクション】は、一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力とされ、「主体性」、「働きかける力」、「実行力」の3つの能力要素で構成される。今回の調査では、0.13ポイント（6.10%）の増加であったが3つの能力の内でも最も増加ポイントが大きい結果となった。「働きかけ力」と「実行力」では、ともに0.16ポイントと0.20ポイントの増加であったが、「主体性」は0.07ポイントと増加幅は低値であった。金田と引原¹¹⁾は、大学体育にてゴルフを受講する学生の【アクション】の3つの能力要素の「主体性」、「働きかける力」、および「実行力」は、授業後に有意に得点が向上したと報告し、その理由として「種々の方法にて明確にゴルフスイングを修得する」という目的設定が得点増加に作用したと分析している。しかし、本学の体育実技ではレクスポーツやバドミントンを含め多くの種目が「技能習得」を主目的（あるいは第一目的）とはせず、高等学校までの体育科あるいは保健体育科とは異なり、活動そのものを楽しむことで生涯スポーツに繋がる「取り組み方（＝態度）」の修得を主目的としている。したがって、体育実技の主旨が反映された結果、先行研究とは異なり「主体性」の得点増加が小さかったと考える。

4.2.2. 【シンキング】の変容

【シンキング】は、疑問を持ち、自ら深く考える力であり、「課題発見力」、「創造性」、「計画力」の3つの能力要素で構成される。今回の調査では、0.07ポイント（3.04%）の増加であった。それぞれの能力要素別では、「課題発見力」が0.07ポイント（3.07%）の増加、「計画力」が0-0.02ポイント（0.82%）の減少、そして「創造力」が0.14ポイント（6.42%）の増加となった。金田と引原¹¹⁾及び引原ら⁷⁾は「課題発見力」にて有意な得点増加を報告したが、塙⁵⁾は有意な向上は認められなかったと報告し、一致した結果は得られていない。この【シンキング】の得点変容の大きさにも本学体育実技の基本的主旨が作用していると推察される。すなわち、本学ではスポーツの技能を第一の目的とはしていないため、技能習得のための過程で習得されるであろう「課題発見力」の能力向上が自覚できなかったため得点の増加が小さかったと推察される。また、それが「課題発見力」よりも「創造力」の得点増加幅が大きくなり、先行研究とは異なる結果となったのではないかと考えられる。したがって今後も調査を継続して検証しなければならない。

4.2.3. 【チームワーク】の変容

【チームワーク】は、多様な人々とともに、目標に向けて協力する力を意味し、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール」の6つの能力要素により構成される。今回

の、【チームワーク】を構成する6つの能力要素の各得点平均値の変容の調査結果では、「発信力」が0.10ポイント（4.33%）、「傾聴力」が0.06ポイント（2.93%）、「柔軟性」が0.11ポイント（5.29%）、「情況把握力」が0.19ポイント（9.18%）、「規律性」が0.19ポイント（9.84%）、そして「ストレスコントロール」が0.02ポイント（0.83%）といずれの能力要素でも得点が増加する傾向が認められた。今回の調査で得点増加幅が大きかった「情況把握力」は自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力と、であり「規律性」は社会のルールや人との約束を守る力、である。このことから調査対象となった非スポーツ学生は、ルールを守った下で周囲の仲間との関係性を理解して行動していたと理解できる。また「発信力」は、自分の意見をわかりやすく伝える力、「柔軟性」は、意見の違いや立場の違いを理解する力であるため、体育実技を履修する学生相互が様々な場面にて立場や意見の違いを理解して自分の意見を分かりやすく伝えていたのではないかと推察できる結果であった。一方、「ストレスコントロール」は、最も得点増加率が小さい結果を示した。埴⁵⁾は、バドミントンに特化した体育実技の前後で社会人基礎力を調査した結果、「ストレスコントロール」では有意な差が認められず、その理由として、ストレスコントロール力に繋がる場面がなかったために、そのことに対処して自己を向上させることができなかった、と報告している。本学の体育実技では、「規律性」を基に授業ルールを遵守した上で、身体活動そのものを楽しむという主旨のため「ストレスコントロール」が発揮される場面が少なく得点平均値の増加率が小さくなったのではないかと推察される。

5.まとめと残された今後の課題

本研究は、本学の教養科目である大学体育、つまり体育実技Aを履修した非スポーツ学生の社会人基礎力の変容を質問紙により調査し、非スポーツ学生が大学体育を履修する意義の確認と試みた。それにより本学の体育実技の有益性と課題を見出そうと試行した。その結果、次のことが明らかとなった。

- (1) 非スポーツ学生の社会人基礎力自己評価総得点は、統計的に有意な増加が認められた。
- (2) 社会人基礎力を構成する3つの能力では、【アクション】と【チームワーク】の得点増加が大きく、【シンキング】の得点増加幅は2つの能力と比較して小さい傾向を示した。ただし、3つの能力全てで得点は増加した。
- (3) 3つの能力を構成する12の能力要素の内、11の能力要素で得点が増加する傾向が認められた。
- (4) 調査対象の非スポーツ学生が成長を自覚した能力を3つから選択回答させたところ、【チームワーク】と回答する学生の割合が最も多く、得点平均値の増加と同様な結果を示した。
- (5) 今回の調査では、スポーツ学生と同様に非スポーツ学生でも体育実技の受講により社会人基礎力の増加が認められ、大学体育の価値が再確認された。

今後の課題としては、本研究にて調査対象となった非スポーツ学生は168名中40名の23.81%でありサンプル数としては十分とは言えない。継続的で総合的な調査により非スポーツ学生の社会人基礎力の向上を確認する必要がある。

引用文献・参考文献

- 1) 古田康生, 原田理科人: 最近3か年の本学初年次学生の体力テスト結果に関する一考察: 踏み台昇降テストによる全身持久力に着目して, 岐阜協立大学論集第55巻第1号, p 17-24, 2021
- 2) 古田康生, 原田理人: 本学スポーツ経営専攻学生の社会人基礎力の特徴-同専攻での学年間での比較検討-, 地域創生第42集, p 51-60, 2023
- 3) 古田康生, 揖斐祐治, 渡部昌史: 大学生が必修体育実技を履修する意義-2017年度から2019年度学生に

おける形態計測の観点から, 岐阜協立大学論集第 57 巻第 2 号, p 45-57, 2024

4) 古田康生, 日比千穂: 大学体育においてレクリエーションスポーツ種目を実施する価値-社会人基礎力の変容に着目しての検討-, 自由時間研究第 49 号, p 60-72, 2024

5) 塙佐敏: 演習形式を導入した体育授業が「社会人基礎力」の向上に及ぼす影響, 愛知学泉大学紀要, Vol. 4, No. 2: 17-24, 2022

6) 岐阜協立大学体育研究室: 2024 年度体育実技・スポーツ実習「実施要項」, p 1-2, 2024

7) 引原有輝, 森田啓, 若林斉, 金田晃一: 実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響, 大学体育学, 13: 16-25, 2016

8) 石道峰典, 西脇雅人, 中村友浩: 選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について, 大学体育研究, 7: 1-10, 2015

9) 石道峰典, 西脇雅人, 中村友浩: 体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証, 大学体育研究, 13: 26-34, 2016

10) 石道峰典, 西脇雅人, 中村友浩: 体育実技授業による visual analog scale (VAS) 法を用いた社会人基礎力の評価に関する検討, 大学体育学第 14 巻, p 67-78, 2017

11) 金田晃一, 引原有輝: 学外活動を伴う集中型の大学体育授業が受講学生の社会人基礎力におよぼす影響: ゴルフ種目を対象に, 大学体育学, 15: 22-30, 2018

12) 経済産業省 (2018) 「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」(人材力研究会) 報告書. https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf (参照日 2022 年 12 月 25 日)

13) 公益社団法人大学体育連合: 大学体育の必要性についての提言, 大学体育第 18 巻第 1 号, p 87-90, 1991

14) 黒岩一雄, 伊藤宏, 大矢隆二, 木宮敬信: 球技ゴール型スポーツにおけるアクティブ・ラーニングの実践的研究-学生の主体性を意識した授業展開に着目して-, 常葉大学教育学部紀要第 38 号, p 271-281, 2017

15) 森田啓, 引原有輝, 若林斉, 金田晃一, 西林賢武: 学士課程教育における大学体育-その可能性と再定義-, 体育学研究第 61 巻第 1 号, p 217-227, 2016

16) 菅家沙由梨, 浅井泰詞: 大学におけるエアロビックダンス授業が社会人基礎力に及ぼす影響, 文化学園大学紀要第 55 集, p 25-35, 2024

17) 清水一彦: 大学設置基準の大綱化と大学の変貌, 日本教育行政学会年報第 20 巻, p 25-37, 1994

付記

本研究で開示すべき利益相反はない。本研究を実施するにあたり、快く調査対象学生を引き受けて頂いた非スポーツ学生の皆様には感謝申し上げます。また、調査実施において本学非常勤講師の小原慶祐氏に多大なる協力を得た。ここに記し、感謝申し上げます。